

姉妹都市アウクスブルク市を訪れて

団長 豊島 源史

旅立ち

8月21日、関西国際空港 21時30分の集合時間を待たずに、アウクスブルク市訪問 尼崎市青年使節団 10人は集合しました。

団員は5月に試験を行い、選ばれてから、ほぼ毎週のように研修をこなしてきました。両市のこれまでの姉妹都市の歴史や我が街 尼崎市の歴史や尼崎市の現状、使節団OB OGとの懇談、また、今までにアウクスブルク市から頂いた記念品を多く設置している庄下川公園の見学などなど。研修会初日は団員同士微妙な距離感がありましたが、研修会を重ねることによって、その距離はぐっと縮まり、空港では冗談を言い合うような仲になっていました。

アウクスブルク市は昭和34年に尼崎市、そして滋賀県長浜市とも姉妹都市関係を締結しています。今回、長浜市も使節団10人を派遣し、同じ行程で行動するため、空港で合流。一路ドイツへ向かいます。

アウクスブルク市へ～ホストファミリーと対面

長時間のフライトから早く解放されたいとの思いも加わり、まさに待望のミュンヘン空港。お待たせしていたアウクスブルク市職員の皆さん方とも挨拶を交わし、バスで近くのレストランへ向かいます。道中、テレビの紀行番組で見たことがあるような洋風の街並みが目の前にあり、カメラのシャッターを切る指が止まりませんでした。

午後の軽食として頂きましたのは、アウ

クスブルク市があるバイエルン州の郷土料理、パンでできたダンゴ「ゼンメルクヌーデル」。キノコたっぷりのソースがやさしい味です。しかし、野球のボール大のダンゴが2つあり、なんとか完食しましたが、これから先の食に対する期待(=おいしさ)と不安(=量)を感じる食事となりました。

バスは一路アウトバーンでアウクスブルク市へ向かいます。ミュンヘンから1時間、ホストファミリーとの対面が近づくとつれ、団員達に緊張感が走ります。

会場に着き、一人ひとり名前が呼ばれ、ホストファミリーと対面すると、握手、ハグ等でホストファミリーの皆さんが笑顔で導いてくださり、それに応えて団員達も自然に応え、心配は杞憂に終わりました。



ホストファミリーの皆さんと和やかに歓談

これまで57年に亘り姉妹都市の友好関係が脈々と続いてきたという共通項が、より親密な関係をもたらしてくれていることを実感した瞬間でした。改めて諸先輩方に感謝感謝です。また、今年のホストファミリーは、以前アウクスブルク市青年使節団として尼崎市を訪問された方ばかりとのこ

と。ここでも共通の話題で距離を縮めることができました。

視察・表敬訪問など

1 WWK アレーナ

2 日目は朝からサッカー1部リーグに所属するチーム、FCアウクスブルクの本拠地であるWWKアレーナを見学。ドイツは2014年のサッカーワールドカップブラジル大会でも優勝し、サッカー熱も高いお国柄です。団員の中にも大のサッカー好きがおり、この視察を楽しみにしていました。

スタジアムは観客席がピッチの間際まで迫り、臨場感溢れる造り。芝のぎりぎりまで入らせて頂き、気持ちはベッケンバウアーといったところです。

芝の緑が夏の太陽を浴び、まぶしいほど。アウクスブルク市は2本の大きな河川に面し、地下水が豊富。芝の育成にはこの地下水が利用されているそうです。

また、この夏からチームには、日本代表の宇佐美貴史選手が移籍しています。視察後、練習グラウンドに宇佐美選手を見つけると、団員達のボルテージは急上昇。尼崎市から青年使節団として姉妹都市アウクスブルク市へ来ている趣旨を説明すると、気軽に写真撮影、サインに応じて頂きました。



宇佐美選手とともに記念撮影

2 表敬訪問

アウクスブルク市庁舎は1615年の建築です。第2次世界大戦の戦火に襲われ、大きな被害を受けましたが、運良く残っていた過去の資料から、当時と同じ材料を調達し再建されました。我々が招かれたのは黄金の間という広間。ここは3階分ほどもありそうな天井までの高さで、部屋中に絵画、装飾品が、至るところ黄金色に施され、まさに豪華絢爛、荘厳華麗といった趣でした。

その後、隣の部屋へ案内され、その日、公務で出席できなかったDr. グリーブル市長の代理のヴルム議員を始めとする関係者の皆さんが温かく迎えて下さいます。議員からは、歓迎のお言葉とともに50年以上に亘り続けている両市の友好関係を、今後も発展させていきたい。そのためにもこの青年使節団も未永く継続していきたいといったお話を頂きました。私からも、同じ趣旨の話をするとともに、今年尼崎市が100周年を迎え、本年10月に開催されます尼崎市での記念式典に来られる予定のヴルム議員を始めとする皆さんと尼崎市での再会を心待ちにすること等をお伝えしました。



市庁舎黄金の間にて記念撮影

3 ダッハウ強制収容所

今回の使節団視察の大きな目的の一つと

いってもいいのがここ、ダッハウ強制収容所。この強制収容所はドイツが第2次世界大戦時に反社会分子という名目で、罪なき人々を収容し、残忍なまでの仕打ちを行った施設です。ドイツを中心に近隣国まで多くの強制収容所があったそうです。

普段は元気で笑いが絶えない団員達もこの時は真剣で神妙な面持ち。現実味が感じられなかった歴史上の話が、ここでは容赦のない現実のものとして叩きつけられます。



説明に真剣に聞き入ります

人を人として扱わない感覚がどのように芽生えるのか、それが当時のドイツで多くの人にどうして受け入れられたのか。第1次世界大戦で敗戦国となったドイツに課せられた多額の賠償金、喪失した領土、そして近隣国との関係といった時代背景の説明はお聞きしましたが、決して理解できるものではありません。

この悲劇を教訓に、ドイツでは一定の年齢になるとこれら施設を訪れ、歴史教育を受けるプログラムがあるそうです。この施設を訪れ、このような悲劇を2度と生まないために、私自身も将来にわたり語り継ぐことが必要であると感じました。

4 フェアウェルパーティー

フェアウェルパーティーは市関係者、関

係団体、ホストファミリーが一堂に会するお別れ会。団員はこの日の出し物、尼崎の紹介ビデオと団員手作りの漢字カルタを日本から準備していきました。ビデオは各団員が自宅周辺の紹介したい風景を撮影し、それを15分程にまとめたもの。だんじり祭や21世紀の森、つかしんのアウクスブルクコーナーなど。尼崎に来られたことのある方も多く、皆さん興味津々でご覧頂きました。また、漢字カルタはテーブル毎にカルタを配り、漢字の意味も学べるように映像を交えながら進めます。皆さん、我先にカルタを取ろうと、大盛況でした。



会場はカルタで大盛り上がり

私はこの日この地で誕生日を迎えました。昼食会場で団員からのサプライズのプレゼントに始まり、表敬訪問でお会いできなかったDr.グリーブル市長が会場へお越しになり、ご挨拶頂き、こちらも御礼等申し上げた後、市長から「ミスタートヨシマ！」と呼ばれ、誕生日プレゼントを頂戴いたしました。さらにこのフェアウェルパーティーでも会場一同からドイツの誕生日ソングのプレゼントも。日に3度も、目頭が熱くなる生涯忘れられない誕生日となりました。

友好関係を深めるために

今回の視察先は、事前に団員が興味ある

場所、施設の REQUEST をアウクスブルク市へ伝え、市職員の皆さんが行程を用意して頂きました。



植物園で市民の方と交流する団員

その視察メニューは大聖堂、バイオマスエネルギー施設、福祉施設「フッゲライ」、植物園（尼崎市職員の先輩方が現地で日本庭園の造園にあたられました）、大学、シェッツラー宮殿、市場、ノイシュヴァンシュタイン城、ヴィース教会など盛りだくさん。

私は税金の滞納整理業務を行っているアウクスブルク市職員との意見交換会も設定して頂き、貴重なお話をお聞きしました。そのほか、独日協会主催のドイツ料理体験会やホストファミリーと団員が1日自由に過ごす日では、サッカー観戦に行ったり、祭に行ったりしたようで、ホストファミリーの皆さんも団員を家族として触れ合ってもらいました。また、「家族として」ということでは、滞在期間中、喉に変調をきたした団員がホストファミリーから飴を持たして頂いたり、他の団員は視察途中でお腹が空かないよう、果物等を持たせて頂いたりとお気遣いが大変温かく、その甲斐あってか、全員大過なく過ごすことができました。

この使節団の交流は毎年、両市間で交互に行っています。団員には、来年以降尼崎市でホストファミリーとしての受け入れな

どを期待します。アウクスブルク市で自分達がして頂いたことを、次は我々がする番。同じことはできなくても、同じ気持ちでお迎えをお手伝いすることはできるはずです。これは、これまで続いている両市の友好関係において、先輩達もされてきたことだと思います。

最後に、ドイツを離れるミュンヘン空港で私がしました挨拶を記します。これはその場におられたアウクスブルク市職員の皆さんと団員に向けたものです。

「この夢のような1週間は振り返るとあっという間にも感じますし、皆さんがご用意頂いた内容が濃い視察スケジュールのおかげで10日にも2週間にも感じられ、時間の感覚がおかしくなる程です。生涯忘れられない、いい思い出にもなりましたし、貴重な体験になりました。この使節団の受け入れにご尽力頂いた Dr. グリーブル市長を筆頭とするアウクスブルク市、独日協会、アウクスブルクインターナショナル、関係者の方々、そしてホストファミリーの皆さんにお礼申し上げます。

今日で使節団の訪問は終わります。しかし、この地を見て、感じたことを団員達がこれからの生活にどのように活かしていくか。両市の友好関係を継続してさらに深いものにしていくために団員個人個人が何ができるかを考え行動していく必要がありますので、これからも使節団の役割は続いていきます。」

そして、10月の市制100周年記念式典でアウクスブルク市代表団との再会を再度誓うとともに、いつの日かこの地を再び訪れることができると心でつぶやき、ドイツの地を後にしました。